

海亀の輝きは

瀬戸内町立西阿室小学校 六年 仲山 碧

「やつぱり、ゴミ増えてるよなあ、最近。」

浜に流れ着いたゴミを拾いながら、シヨウヘイはつぶやいた。

ここは南の島のとある町。ここでは、定期的に海岸を皆で掃除することになっている。シヨウヘイはこの町でずっと海岸そうじをしてきて、だんだんとゴミが増えてるのが気になっていった。時々、海面からはねる魚たちも、まるでいやなおいをがまんして、困った顔をしているように見える。

その月、シヨウヘイの学校に転校生のタクヤがやってきた。男同士すぐに仲よくなった。島のことや海のこと、色々話した。

夏休みになった。タクヤの家に遊びに行つて玄関まで来たとき、涙目になったタクヤが、何やらごちやごちやした大きな荷物を持って出てきた。

「おいタクヤ、どうしたの。だいじょうぶか。」

「今、部屋が片付いてないからつて、親と大げんかした。」

どうやら、自分のことは自分でしなさいと親にしかられ

て、分別ができていない荷物やゴミをまとめて渡され、「いい加減にしなさい。」ときつく言われ、どうすることもできなくなり出てきたらしい。部屋の片付けで親子げんかはぼくだつてよくする。「気持ちちは分かる。」とシヨウヘイは同情した。

だが、問題はその後だつた。全く怒りが収まらないタクヤが、そばの海に走つて行きながら、さげんだ。

「だつたらもう、こんなもの海に全部すててやる。」

「待て待て、それはだめでしょ。」

止めようとしたが時すでに遅し。よくわからない荷物やゴミが宙を舞い、バシャバシャと海に落ちた。

二人とも涙目になりながら、海に流されていくゴミを眺めた。「ああ、どうしよう。」暑さと涙で景色がくもり、視界が真っ黒になった。

そのとき、不思議なものを見た。とてつもなく大きい亀が二匹、暗い海の底から上がってきた。一匹は赤く、もう一匹は青い。

しかし、何か様子が変だつた。一匹は網が引つかかっている。もう一匹は、甲羅にドロドロとした汚れが付いている。二匹の亀が顔を出し、大きく呼吸したかと思うと、シヨウヘイとタクヤは引き寄せられ、吸い込まれた。シヨウヘイが気付くと、海の中だつた。しかも、ゆっくり、のっそり泳ぐさっきの大亀の甲羅の上にいた。汚

れまみれの甲羅だ。ゴミもへばりついていて、気分が悪くなる。見渡すと、ショウヘイのそばで誰かが甲羅を掃除している。亀の召使いだろうか。

いや、ちがう。あれはタクヤだ。

「おつ、ショウヘイ起きたか。はやくみがこうぜ。」

「みがこう、って言われても、どうやって。」と思ったしゅん間、手にはデッキブラシが現れた。タクヤが続けて言った。

「きっと、おれがあんなことをしたからだ。」

亀は、海の汚れを全て甲羅に背負って生きているようだった。だから、二人は必死でみがいた。少しずつきれいにしていった。みがき終わると、赤い甲羅がキラキラと輝きだした。その時分かった。元は輝いていたのだ。

タクヤは言った。

「よし。次は、もう一匹の網が引つかかっている方だ。」二人で協力して、巨大な亀から慎重に網を外した。するとこつちも、青く輝きだした。体が自由になりとてもうれしそうだ。

急に、視界が元に戻った。二人はあいかわらず海に向かって立っていた。タクヤが海に投げ捨てたはずのものは、なぜかびちやびちやの状態で足下にまとめて置かれていた。

あれは、海のヌシともいうべき亀たちが、ぼくたちに

助けを求めたのか、それとも注意するために来たのかはわからない。

ただ、二人は顔を見合わせ、ゆっくり、大きくうなずいた。

それから、ショウヘイとタクヤは、ゴミ拾い活動をましますがんばるようになった。そして、正しくものが捨てられるようにゴミ箱を作って町に置いたり、分別やりサイクルを呼びかけるポスターを作ったりした。

一年後、ゴミは減っていった。すきとおる海やきれいな砂浜は有名になり、久しぶりにこの町の浜にウミガメが産卵に来たというニュースも聞き、二人はうれしくなった。その産卵の様子を見かけた人によると、その亀は赤や青に輝いている亀だったらしい。赤と青の輝きなんてさすがに大げさだろう。

晴れた夏の日。きらきらしているじまんの海を二人が眺めていると、海面で魚がはねた。

「なんだか、魚がうれしそうなんだよなあ。最近。」